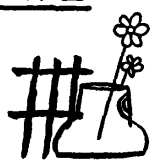
巻頭言



情報処理学会とソフトウェアハウス

三　吉　健　滋†

1990年には情報処理学会も30周年を迎えることとなる．

主に理工学部で行われる学問のなかで，産業界が先行し，学界が後追いした希有な学問が情報処理学であろう．情報処理学会は誕生からして他の学会に比してより産業界に近い学会である必要があり，そうでなければ存在意義にかけると思うべきである．

ソフトウェアハウス及びメーカ系ソフトウェア会社に在籍する学会員は多目に見積もれば全学会員の四分の一である．この多くの人たちは社会ニーズに対応したソフトウェアの開発に携わっている．学会としてこの会員の期待にも十分応える必要がある．

現在ソフトウェアハウスは小規模な組織が多い．しかし多くの情報処理技術者はこの組織に属しており情報処理技術を発揮し社会に貢献している．にも拘らずこれら技術者の会員数は極めて少ない．日本全国で5千社とも6千社ともいわれるソフトウェアハウスに在籍する情報処理技術者にとって学会の敷居は少々高く見えるようである．学界及び大規模組織だけを対象にしている学会活動であるとすると日本の情報処理にとって極めて遺憾である．隠れた情報処理技術者に対する啓蒙を行う為にも“見える学会”でなければならない．そのことによって，ソフトウェアハウスに在籍する情報処理技術者の関心が学会に向けられるのではなかろうか．

学会の運営層も過去の学界偏重から学界と産業界とのバランスを考慮した構成になっていることは喜ばしい．現在大多数の会員は学会との繋がりを学会誌，論文誌に代表される会誌の購読と全国大会への参加の二点に持っているに過ぎない．全国大会にしても論文投稿数一千件余，参加者数二千名というオーダである．これは三万余にならんとしている会員数に対してあまりにも少ない．もっと多くの会員が学会活動に参画できる場を作る必要がある．また学会誌にしても難解過ぎるとの意見も耳にする．実学としての論文，記事が掲載されてもよいのではないか．

会員諸兄も論文投稿，全国大会，研究会，シンポジウム参加等に積極的であってほしい一方，学会としても多様な会員サービスを行う必要がある．その一つに学会自身が情報集発信基地としての確固とした場を持つ必要があるのではなかろうか．30周年記念事業運営の一つに未来委員会があり，その中で情報ビル構想が議論されている．これは建築学会のように学会所有のビルを持つことを意味するものでは必ずしもない．会員が相互に情報交流が行え，情報収集／発信が行え，研究会，シンポジウム等が場所の確保に腐心することなく開催できる環境を整備する必要があるのではなかろうか．

企業でもニューオフィスの歌い文句のもとに作業環境の整備が色々な面での質の向上に必要であると確信されている．学会といえども会員に対するサービスの質の向上，多様性の発揮に環境整備は不可欠と考える．会員の特典として広く利用できる環境を持つことは会員を第一に学会の発展にとって重要であり草の根となっている潜在会員予備軍を会員とする起爆剤ともなる．細々と裏方のように学会活動をすることを良しとするのは過去の美学である．情報ビル構想にしても会員各位の活発な，建設的な意見が寄せられることを願うものである．

情報処理学は学問の為の学問ではない．またそのことに誇りをもつべきである．

多様化は世の趨勢であり情報処理学会も例外ではない．学会誌，論文誌，全国大会の多様化は会員の学会活動への積極的参加及び会員の得るべきサービスの質並びに量の向上に不可欠である．

平成元年にあたり学会としても，全国大会論文投稿機会の増進サービスの多様化等今後検討しなければならない事項は多い．

（平成元年1月20日）

† 本会理事　(株)構造計画研究所